

平成 20 年 9 月 2 日

横浜市長 中田 宏殿

## 汚職判明後の脳血管医療センター長任命に対する抗議と質問

汚職 ― 職を汚す事、職務に関して不正に金銭を取得すること等

「脳卒中から助かる会」

代表 上野 正（東京大学名誉教授）

**I 抗議** 私達は、横浜市長が横浜市立大学元教授山本勇夫氏を横浜市立脳血管医療センター長に任命したことに対し、以下の理由により抗議します。

市長は、この抗議を正面から受け止め、善処して頂きたい。

1. 山本勇夫氏の、横浜市大医学部在職中の学位審査に関する汚職は、定年退職した後、センター長に就任する前に判明していた。

一方、脳血管医療センターは医師不足が続き、看護部の規律が緩んで昨年のような死亡事故も起こった。このような時期に後ろ暗い所のある人物が、センター長として医師、看護師等職員の信頼を得て、規律とモラルを正し、向上させることが出来るものであろうか？

私達はこの点を最も不安に感じている。

2. 山本勇夫氏のセンター長任命には、市大からの医師導入への期待があったと言われるが、その市大自身が大量の汚職者処分で揺れている。

横浜市大以外の大学や、全国の病院の医師から見て、汚職判明後のセンター長就任はどう映るであろうか？ 汚職直後の人物が学長に天下った大学や、頭取に天下った銀行の社会的評価を考えれば明らかである。

今回の人事は、センターの信用を大きく傷つけ、優れた医師を広く集める上でも障害となる。

3. 横浜市では、バス料金の多額横領事件、幹部職員の不法な選挙運動、今回の学位審査汚職事件など、数々の規律違反、不法事件が続いて居る。

横浜市は、コンプライアンスの重視を一応は強調しているが、今回のセンター長人事は、市の重要ポストへの職員採用にあたって、汚職などは事実上何の障害にもならない事を示しており、不法行為、汚職などは増々広がるであろう。

**Ⅱ 質問** 今回の脳血管医療センター人事について、以下の質問にお答え下さい。 横浜市長としての責任において、市長自身の言葉でお答え願います。

1. 定年退職後に汚職が判明した者がセンター長に就くことが、センターの規律、モラルの維持、向上の障害になることは全く想定していなかったか？

もし想定していたとすれば、どのような判断で任命を行ったか？

2. 汚職判明者がセンター長に天下ることで、全国的にも知られた脳卒中専門病院としてのセンターの社会的信用と、横浜市の行政の信用が、低下するとは全く考えなかったか？ 優秀な医師を広く全国から招致する上での障害となる点についてはどうか？

3. 今回の人事で、横浜市の行政において頻発している不法行為、汚職等の防止について、横浜市の姿勢に疑問が持たれている。疑問を持たれる事は全く予想していなかったか？

予想していたとすれば、今回の決定に当たってどのように判断したか？

4. 山本勇夫氏の定年退職から、センター長任命までに4箇月半が経過した理由は何か？

**Ⅲ. 山本勇夫センター長の「センターにおけるチャレンジ」の強調について。**

8月の横浜市会常任委員会で、山本勇夫氏はセンター長として「センターは過去の事故を引きずって萎縮している」として、センターにおけるチャレンジの必要を強調した。

言うまでもなく、現在の脳卒中医療は急速に進歩しており、高度の医療を行うセンターにおいてチャレンジが必要な事は当然である。

然しながらチャレンジに当たっては、担当者の能力と準備、モラルが極めて重要である。今回の山本勇夫氏の発言の姿勢には危惧を感じる点があるので、ここに指摘しておく。

なお、これは汚職後のセンター長就任とは違う性質の事柄なので別記する。

脳血管医療センターでは平成15年7月、3人の脳外科医がセンターでは未経験の内視鏡手術を、未研修のまま、しかもセンターのルールに違反して行っ

た結果、患者は重篤の障害を負って、今も身動きさえ困難な状態で治療を受けている。更にそのあと、事故隠しが行われて1年後に発覚、平成17年始め衛生局幹部職員を含む大量の処分者が出た。

この手術の担当者3人は、いずれも横浜市大の脳外科の責任者であった山本勇夫教授が医局からセンターに派遣した医師であった。

センターではこの事故の翌月にも、2人の医師が専門外の脳血管内治療を、これもセンターのルールに違反して行い、患者は死亡した。インシデントレポートによれば、この手術は「技術も、判断も未熟」なものであった。

センターにおける、以上二つのチャレンジは悲惨な結果に終わった。

新しい事へのチャレンジには、医師の能力、準備、十分な研修とルールの遵守、とくに医師のモラルが不可欠である。これらが欠けていれば、患者は実験台にされてしまう。

以上の「センターの過去の事故」には重大な教訓が含まれている。この教訓をしっかりと認識してチャレンジが行わなければ、患者の生命が危うくされる。

自分自身も無関係とは云えないこの事故について反省の言葉もなく、ただチャレンジが必要だと強調する山本勇夫氏の姿勢に危険を感じるのである。